

リーは、「家族」のつながりを着用者の女性たちに強く意識させ、同じ「家族」であることを成員の内外に示すシンボルのようにはたらいていた。

「わたしはサリーが大好き。『そんなに着ないでしょ』って言われるくらい、たくさん持っています。」普段、洋服を着て過ごしているRさん(Hさんの長男の妻)はこう語っていた。サリーは、日常着としての役割は失われつつあるが、着用者をより美しく見せる衣服としての役割を保っている。彼女たちがサリーに魅了され続ける限り、サリーは場面

に応じて意味を変え、ネパールの女性たちに着用され続けるのだろう。

引用文献

- 石井 溥. 1976. 「ネワール村落調査報告(3) —ネワール村落における家族」『アジア・アフリカ言語文化研究』12: 139-170.
- 杉本星子. 2020. 「グローバル経済とナショナル・ドレスのファッション・トレンド—インド・ウエスタンとGIプロダクトサリーをめぐる」帯谷知可・後藤絵美編『装いと規範3「伝統」と「ナショナル」を問い直す』京都大学東南アジア地域研究研究所, 29-39.

告白に使われた口琴の行方

三宅千夏*

「ラオヤほかの民族の楽器はただ大きな音になるだけだ。この口琴のように物語は話せない。」ラオスで会ったモン族の口琴職人は笑いながらそう言った。

「口琴」という楽器をご存知だろうか。小さな板や枠に付いている弁を、紐を引いたり指で弾いたりして振動させ、その振動を演奏者の口から体内に響かせて音を出す楽器である。音階はなく、口の大きさや舌の動きなどで音の高低や音色を変化させる。マイナーな楽器だが、世界に広く分布しており、それぞ

れの地域で形や素材、演奏方法が異なる。日本では、アイヌ民族のムックリが有名で、風の音や熊の鳴き声など自然界の音を表現する。そんな口琴が私のフィールドであるラオスにもあるという話を聞いていたため、調査の傍ら口琴に関する情報も収集していた。目撃情報をもとに最初に見つけたのは、首都ビエンチャンのショッピングモール2階モン族楽器店のガラスケースの中にある、ピンク色の竹筒に入った口琴だった(写真1)。紙の栓を抜き、10センチメートルほどの竹筒

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

を縦に振ると、中から真鍮で作られた細長く鋭い板状をした口琴が出てきた。店主に聞くと、その口琴は「ルアンパバーン県キウカチャム村」で作られているという。ぜひ製作過程と演奏される様子を見たいと思い、調査の合間を見計らってルアンパバーンに赴いた。

ルアンパバーン県は山岳地帯の広がるラオス北部に位置し、少数民族が多く暮らしている。モン族も高地に住む少数民族のひとつであり、ルアンパバーン県や隣接するシェンクワン県などにはモン族の村が多く存在する。口琴職人がいるというキウカチャム村もそのひとつである。ルアンパバーン市街地から75キロメートルほど離れたキウカチャム村に行くには、さらに標高の高い地域であるプークーン行きの乗合いバスに乗る必要がある。バスといってもトラックの荷台部分に縦2列のベンチが並んだ「ソントオ」と呼ばれる乗り物である。荷台には乗客の荷物の他に通過地点まで運ぶ荷物がいくつも積まれている。足元を窮屈にした乗客たちを乗せて、ソントオはバスターミナルを出発した。キウカ

チャム村に行く外国人が珍しいからか他の乗客から目的を尋ねられ、事情を説明すると、彼女もモン族で口琴の存在を知っているらしい。目的は口琴だけということに多少呆れられながらも、キウカチャム村にいる親戚を紹介してもらえることになった。

3時間ほどソントオに揺られてキウカチャム村に到着した。標高が高く、空気が澄んでいる。先ほどの女性と一緒に降り、近くの親戚の男性の家に行き手短かに事情を説明してくれた。2人の会話は全てモン語のため理解はできなかったが、その男性がまた違う人の元へ連れて行ってくれるという。男性の後ろをついて路地を行くと、ある家の前で立ち止まり、その家主が口琴に詳しいと紹介してくれた。簡単に自己紹介をし、持ってきた口琴を見せると、試しに1分間ほど演奏してくれた。彼いわく、どうやら隣の「プータート村」にこの口琴の製作者がいるらしい。「ツァイカオリー」という名前で、彼の親戚だという。すぐ近くだというので、お礼を言っておいて隣村へ向かった。

道路からは連なる山々が見渡せる（写真



写真1 モン族の楽器屋で見つけた口琴



写真2 プータート村から見える山々

2). 道の崖側に家が横並びで建てられていて、家の前には子どもや女性が多くみられる。10分ほど歩くとプーアート村に入った。少し進むごとに「ツァイカオリーさんは知らないか」と尋ねてみると、ほとんどの人が彼を知っていて、「もっと先に行って下りたところだ」と教えてくれた。道路の脇から続く赤土の小道で、半分階段のようになった急坂を滑らないよう慎重に進んで行くと、ランダムに並んだ家々が見えてきた。家の軒先で刺繍をしている女性に尋ねると、もっと先の家だと教えてくれる。斜面を下り、集落のかなり下の方まで来た。水場で収穫後の野菜を洗っている女性に声をかけると、モン語だが明るい笑顔で応えてくれ、彼をよく知っている様子だった。近所の若い男性にラオス語でモン語の通訳をお願いすると、その女性が口琴職人ツァイカオリーさんの妻であることを説明してくれた。しかし、本人は畑仕事で忙しくしてその日は会えないことがわかり、後日出直すことになった。

数週間後、もう一度口琴職人の家を訪れ

た。その日は本人も在宅しており、翌日製作過程を見せてもらえることになった。ラオスでよく土産物にされるフランスパンを手に改めて挨拶をすると、囲炉裏で蒸したばかりのもちきびを袋いっぱい持たせてくれた。宿に戻って食べてみると、糖度が高く、甘いというもろこしに引けを取らない美味しさだった。

翌朝家にお邪魔し、早速口琴作りを見学させてもらった。製作場所は家の軒先だ。家の中から持ってきた道具は、作業台を含めほとんどが手作りである(写真3)。まず最初に、材料となる真鍮を小さな塊に切り出して台の上で叩き延ばしていく。少し叩いたら、囲炉裏の火の中で焼入れを行なう。焼入れの際はふいごを使って空気を送り込み、温度を上げる。焼き入れたらまた叩き延ばす。この作業を何度も繰り返しながら少しずつ口琴の細長い形にしていく。薄さが均一になったら、やすりや大きめの刃物で側面を削って形を整える。次に専用の固定台にセットして、振動弁を切り出していく(写真4)。口琴は、弁と周りの枠との隙間が小さい方が綺麗な震動音



写真3 台と道具



写真4 弁を切り出す工程

が鳴るため、この作業には慎重さが必要になる。少しずつ削って溝を深くしていき、完全に切れ込みが入る前に軽く台に投げつける。その衝撃で型を抜くように弁を杵から切り離す。その後竹の板で擦り、何度も光にかざして確認をしながら隙間の微調整を行なう。最後に、弁の根本を少し削っては音を確認するという作業を繰り返し、やっときれいな音の鳴る口琴が出来上がる。竹で専用ケースを作って完成である。

モン族の口琴は単に音を鳴らすだけでなく、口内を動かすことで言葉を話すことができ、コミュニケーションの道具となるのが特徴である。特に結婚前の若い男女が相手に告白をする際に使われ、「あなたは私のことが好きですか。私はあなたのことが気になっています」などといった内容を語りかける。掛け合い歌のような具合で、心地のいい音楽にも聞こえる。「ラオや他の民族の楽器はただ大きな音になるだけだ。この口琴のように物語は話せない」と、自らが作る口琴の魅力を語ってくれた。隣のキウカチャム村にも2人の口琴職人がいるが、畑仕事や家畜の世話が忙しく現在は口琴作りをしていないという。つまり、現在口琴を作っているのはプータート村のツァイカオリーさんひとりだけということになる。

実際にどれだけの人が口琴を演奏できるのか、キウカチャム村に戻りモン族の人々に話を聞いてみた。家の軒先で刺繍をしている女性に話しかけると、最初は怪しそうにこちらの顔を窺っていたが、口琴を見せると一気に表情がゆるみ笑顔になった。そのやりとりを

見ていた周りの女性も数人集まり、モン語で色々と話している。どうやら口琴を見るのが久しぶりで、懐かしいと盛り上がっているようだ。「若い頃にはしていたが、結婚をしてからやらなくなった」、「最近演奏する人がいない」と皆口を揃える。傍にいた10代の若い男性にも聞いてみると、彼は口琴自体見たことがないらしく、物珍しそうに口琴を見ている。女性たちの会話を彼が改めてラオス語で説明してくれた。30～40年前には村のあちこちで見かけるものだったが、今ではスマートフォンも普及したため、口琴を使って気になる異性に想いを伝えるという機会がなくなっただけで、単なる楽器ではなく、コミュニケーションの道具として使われるものであれば、より便利なものにとって代わられるのは仕方のないことなのかもしれない。

では、作られた口琴は一体誰が使っているのか。ツァイカオリーさんによると、海外にも輸出されているという。海外にいるモン族の人々に限らず（モン族はラオス内戦の影響で一部が米国やフランス等に出国しており、世界各地に在外モン・コミュニティが存在している）、民族楽器や口琴好きのコレクターたちが購入するのだと思われる。多くの人は、単に音を出す楽器として口琴を楽しんでいるだろう。今回、試しに口琴を弾いてくれたモン族の人々は、「音があまり長く響かない」と口琴の評価をしていた。言葉を発するには弁の振動が長く続いている必要がある。しかし、この先も本来の使い方ではなく単に音の出る楽器として口琴を楽しむ人が増えた場合、音が長く響くことよりも簡単に綺麗な

音が出るかどうかは口琴にとって大事な要素となっていくのかもしれない。私が探していた、想いを伝える道具としての口琴はすでに

人々の日常から消えて久しく、若かりし日の思い出となって個人の記憶のうちに残っているようだった。